

舞踊ジャンルと受け手の持つ 付带的条件との関係

中井知恵・川口千代

1. 研究の目的

舞踊における観賞の体験は、「多分に感情的ではあるが、一方には、感性的・直感的であって、単なる部分的な知的経験ではなく、むしろ全人的経験といえるもの」であると渡辺江津は指摘している。ところが、実際どのような人々が、このように全人的経験といわれる舞踊観賞を、観賞しているのかについては、舞踊の分野ではあまり着目されてきてはいない。むしろ、これまでの研究は、作品の持つ印象に関するものや、送り手を中心に行ったもの、観賞の場を意図的に設定していたものが多かったのではないかと考えられる。

そこで本研究では、①作品に対し積極的な姿勢を持ち直接劇場へ足を運んでくる受け手は、一体どのような特徴を持っているのか、また②受け手の属性は作品の属するジャンルによってどのように異なるのか、について質問紙を通じて分析し、その具体的内容の検討を試みようとした。

II. 研究の方法

1. 対象

調査対象は舞踊ジャンル別に平成2年8月下旬～10月下旬にかけて各公演の主催者を通じ、郵送回答形式及び筆者自身による劇場での即日回収形式で調査を実施し、古典バレエから612名、モダンダンスから399名、モダン・バレエから329名、ポスト・モダンダンス以降の舞踊（以下ポスト・モダンとする）から367名、合計1647名の観客から有効解答を得た（回収率70.4%、有効回収率57.0%）。

2. 対象作品

対象作品は古典バレエをポリショイ劇場バレエ団作品から、モダンダンスをマーサ・グラハム舞踊団作品から、モダン・バレエをモーリス・ベジャールバレエ団作品から、ポスト・モダンを勅使河原三郎作品、マギー・マラン作品から選択。

3. 調査項目の作成

調査項目については、先行研究を基に、①観客である受け手全体の特徴として、その公演の情報源、来た動機、現在及び過去の興味、ライフスタイルの豊かさを何に求めている人々かについての検討、②受け手の基本的属性及び社会的属性（性別、年代構成、職業構成等）を新たに設定した。さらに、作品評価の項目及び4要因・7要素の28項目からなる享受目的と享受内容別の項目を加え、調査用紙を作成した。

4. 結果の処理

すべてのデータは、筑波大学情報処理センターのSPSS統計パッケージを通して処理を行った。

III. 結果と考察

1. 受け手の一般的特徴

まず、受け手の情報源については、最も多いのが「情報誌」で46.7%、動機では、「その作品・踊り手が好きだから」という理由が54.2%と最も多い。また、現在興味を持っているものは、舞踊、音楽・オペラ、など芸術関係が大半で、過去に自分が関わってきたものは、洋楽器、華道・茶道・書道が多い。そして、自分のライフスタイルの豊かさを何に求めているかについては「精神的・文化的な充足感」という解答が最も多かった。

これらのことから、実際、劇場に足を運ぶ受け手は、精神的・文化的な充足感を求め、芸術関係に関心をもつ人々が、自ら、その作品・踊り手の魅力に引かれて、特定の専門誌などを情報源として劇場に足を運んでいる、という特徴を有していると考えられる。

2. 舞踊ジャンルと受け手の基本的属性・社会的属性との関係

古典バレエおよびモダンダンスでは、女性かつ非芸術関係者が多く、20代・30代を中心に幅広く支持、モダン・バレエでは、特に、女性が男性の5倍以上かつ非芸術関係者が多く、しかも10代から50代まで平均的に支持、ポスト・モダンでは、他のジャンルに比べ男性が女性の過半数以上で、かつ芸術関係者の割合が最も多く、特に、20代を中心とした若者に支持されている。つまり、古典バレエ、および、伝統的な面をもったモダンダンスには、幅広い年齢層に関わらず平均的な支持を得ている、と考えられる。一方、ポスト・モダンには専門的な人々や若者層、男性、の支持率が高い、ということが明らかになった。

IV. まとめ

以上、本研究からは、受け手は、精神的・文化的な価値観を大切にし、芸術関係に関心を持ち、比較的限定的な情報源によって、自らの意志で作品や踊り手の魅力を求め、劇場に足を運んでいる人々である、ということが明らかになった。そして、基本的属性および社会的属性の点において、ジャンル別にはかなりの偏りがみられた。このことは、これらのライフスタイルやその価値観の変遷に伴い、舞踊ジャンルにより、受け手の集中化と分散化という状況が見いだせる、一つの傾向であるとも考えられる。

今後、対象作品の少なさを質的に補う事と共に、一方で送り手はどのような層を対象に作品を作っているのかについて検討を加え、この研究成果と総合的に送り手・受け手のコミュニケーションについて考える必要がある。